令和３年度第１回　立川市文化振興推進委員会　会議録（要旨）

開催日時	令和３年８月３日（火曜日）　（書面開催）
開催場所	－
次第	１.委員委嘱について ２.正副委員長選任 ３.立川市第４次文化振興計画の進捗状況について ４．その他
配布資料	・立川市文化振興推進委員会委員名簿 ・立川市第４次文化振興計画の概要 ・立川市第４次文化振興計画　令和２年度の主な取組状況 ・立川市第４次文化振興計画（冊子）
出席者（敬称略）	［委員］ 委員長　今井良朗、副委員長　瀧川淳、 宇治康、高木誠、田ヶ谷省三、玉川宗則、都築諒、成清北斗、 矢内はな恵
公開及び非公開	－
傍聴者数	－
会議結果	・「第４次文化振興計画　令和２年度の取り組み状況」についての意見を募った。 ・現在のコロナ禍の状況の中での身近にある文化芸術活動について意見を募った。 ・コロナ禍に置いてのイベント等の開催について工夫・配慮・支援等の意見を募った。 ・コロナ禍の状況により動画配信等が利用されているが、動画やお知らせをより注目してもらうためどのような取組が必要か、意見を募った。
担当	産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係 電話　042‐506‐0012

■会議内容（要旨）

１．委嘱状伝達

・今期の文化振興推進委員会発足にあたり委嘱状を送付した。

２．正副委員長選任

・委員長として今井委員、副委員長として瀧川委員の推薦があり、全会一致で承認された。

３．立川市第４次文化振興計画の進捗状況について

（１）資料「第４次文化振興計画　令和２年度の主な取組状況」についての下記のとおり意見をいただいた。

○コロナ禍で中止や縮小を余儀なくされるなかで、シアタープロジェクトなど、対策を講じながら実施したことは素晴らしいと思います。対面の大切さを実感することが出来ますし、制約がある中で積極的に活動することも必要だと思います。

〈文化芸術に触れる機会があると思う割合〉を高めていくことは今後の課題でしょうか。〈つたえる、とどける〉〈つなげる、ひろげる〉は、ウェブサイトの活用とコンテンツづくりがますます重要になっていくように思います。（委員長）

○事業報告を読ませていただき、コロナ禍にあって、文化芸術の振興を止めないという強い意志を感じました。来場者の減少については、致し方ないと思います。また若手支援や情報発信のための取組などは今後も継続してほしいと思います。文化芸術の意義を伝えていく事業については、シティプロモーションなど、オンライン化を並行して図ることで、より多くの市民に浸透するのではないでしょうか？　そのような技術的な向上がコロナ禍の中で急速に発展し、また市民権を得たように思います。（副委員長）

○取組方針Ⅱ　はぐくむ、ささえるにも関連しますが、当財団においても立川市内全中学校１年生を対象にたましん美術館の鑑賞教室を 2021 年 11 月～2022 年 3 月にかけて行う予定です。（Ａ委員）

○とてもまとまっており良いと思います。後は具体的に、シティプロモーションの展開として、何を強化していくか(私が担当しております立川ビルボードなども含め)。事業者・民間イベント等との連携をどのようにはかっていくのか？多様な主体や他の分野との連携・交流の促進をどのように進めていくのか？(観光などとの連携など)が、課題になってくるかと思います。

そのため、市民、事業者、ほか新たに設立されました立川観光コンベンション協会様や商工会議所様、立川商店街連合会様などとの連携を促進していくことが重要かと思います。（Ｂ委員）

○令和３年７月時点での取組状況は、「ふれる、たのしむ」などの方針に沿い、良く行われていると思う。特に重点項目は、力を注いだ跡が見られ、新しい展開や広がりも期待できる。ここ１年半のコロナ禍でさまざまな活動が制限される中、開催中止や延期を余儀なくされた

活動等を、今後どのようにサポートしていくか大変な事態だが、英知を集め対処していただきたい。

11 頁の■まちづくり協議会の自主事業　の中にＴＡＣＨＩＫＡＷＡ　ＢＩＬＬＢＯＡＲＤ紹介があり、ＷＥＢ記事を読む。全体が良く出来ていて、豊富な写真やレポート記事もわかりやすい。NEWS というにはいささか古いかなと思われる欄もあるが更新が増えることを期待したい。

今後の資料作成の際の参考に、コロナ禍での市の宣言、公共施設の利用規定の一部臨時変更などの現時点の記録が巻末に一覧としてまとめてある※1と良かった。1，2 頁等に数度出て来る「新型コロナウイルス感染症の影響により…」の具体的な影響が把握できるし、市外の委員の方にも立川市の対応が見えると思うので。（Ｃ委員）

○なんとなく支援に偏りがあるように感じます。力のない人々や作家にも支援をすることが今後の大きな課題になるかと思います。声の大きな人ばかりが得をするのではなく、声を上げられないアーティストや市民にもきちんと支援していくのが行政の本来のあり方かと考えます。それが、文化芸術の本当の底上げと、市民生活の豊かさにつながると思います。（Ｄ委員）

○各種活動がコロナ禍により開催ができない状況が多々あったこと、また一概に全てを中止にするのではなく、文化・芸術を暮らしに必要なものとして開催していることに深い感銘を受けました。

とりわけ取組方針の「Ⅱ」について、文化芸術活動の根幹に関わるものであり、コロナ禍において経済的な被害は勿論、機会の喪失により深刻な被害を被っているため、今後も支援が必要な部分かと思います。（Ｅ委員）

○コロナ禍という不自由な状況にも関わらず様々な取組がなされていることに感心した。

現在の取組に加え、まだ評価の定まっていない同時代的な表現活動や若手アーティストへの支援事業などがより充実すれば、新たな価値の創造にもつながると思う。（Ｆ委員）

○p.5 子ども対象文化芸術事業の充実は、とても良いことだと思います。こうした中で、「子どものためのお琴教室」が終了してしまったのは残念です。子どもが、日本文化や邦楽に直接触れる機会は、近年少なくなっていると思いますので、今後、また別の機会が新たに設けられることを期待いたします。（Ｇ委員）

（事務局注）

※１…立川市の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言での措置等については、東京都の措置に順じて行っており、随時市の新型コロナウイルス感染症対策本部を開催し決定している。市ホームページでは東京都が発出している緊急事態宣言措置の資料及び、本部で決定された立川市の公共施設の利用についてまとめたものを公開している。

・東京都緊急事態宣言措置

https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/1007617/1014544.html

・立川市新型コロナウイルス感染症による施設の利用について

https://www.city.tachikawa.lg.jp/seikatsuanzen/shisetsusaikai.html

（２）現在のコロナ禍の状況の中での身近にある文化芸術活動について、下記の通り意見をいただいた。

○この１年半、オンラインならではの経験は貴重でした。

・「駅ピアノ」の工夫版「家ピアノ」はとても新鮮でした。著名なアーティストの自宅での演奏は、コロナ禍で実現できたものでしょう。

・自宅からそれぞれの演奏者が共演した演奏会も新鮮でした。

・美術館のオンライン鑑賞は、東京国立博物館が際立って素晴らしかったです。

会場では体験できない工夫が随所にあります。全国から鑑賞が可能です。

・オンライン講演も気軽に参加できることから、幾つか視聴しました。

・私もオンライン・ワークショップを行いました。香川県に出向く予定を急きょ変更したのですが、新たな可能性を感じました。会場には人数を制限し集まってもらい、私は自宅から参加しました。

このように対面とオンラインを組み合わせる手法もあると思います。

舞台や展示会場だけでない発表の場があることを実感できました。

場所やメディアの特性を生かす工夫をすれば、さまざまな可能性をつくり出せそうです。

（委員長）

○国立音楽大学では、コロナ禍にあっても細心の感染予防対策を講じながら、芸術する営みを止めずに来ており、おかげさまで、オーケストラも吹奏楽も定期演奏会を今年度は再開することができました。ただ一方で、市民参加型のワークショップや体験演奏会などは、感染予防対策の観点から残念ながら中止になりました。

昨年、私自身が企画監修した事業としましては、熊本県立劇場の協力を得て、劇場ホールから熊本市の小学校に地元のアーティストの演奏をライブ配信する、音楽鑑賞教室があります。これは、コロナ禍にあってなかなか音楽に接することのできなくなった子供達に良質の音楽を届ける一助になり、また活躍の場が激減したアーティスト支援やホール活用の一助にもなりました。昨年７月に１回３０分の公演を７回行いましたが、延べ９０００人の児童が鑑賞しました。いくつか報告書がありますので、必要でしたら提供いたします。（副委員長）

○当財団で令和 3 年 5 月 31 日に発行した多摩のあゆみ第 182 号特集「コロナ禍に向きあう博物館」において各地の博物館がどのような対策や事業を実施したのか、その事例を紹介しております。（Ａ委員）

○あきる野市の話ではございますが、キャンプ場を利用した音楽イベントを定期実施している事業者がおります。昨年より開催し、今年も初回を先日開催しました。コロナ感染対策は徹

底し、アルコールの提供などは、国の指針を遵守しながらも、前向きに行っており、これまでもクラスターなどの発生などは起きておりません。

イベントのプロの会社さんが主催のため、かなり感染対策は徹底しており、リアルと合わせて有料のオンライン配信も行われ、多くの方が参加されております。

https://liveforest.jp/（Ｂ委員）

○　①シニア合唱団「野ばら」、ボイトレクラブの活動

「野ばら」…平均年齢が 75 歳超の団体で、幸学習館や高松学習館等で活動。市の合唱祭や学習館の発表機会がなくなり、活動が停滞ぎみ。東京混声合唱団特製のマスク（専門家の安全確認認証済）を半数以上が購入し、団独自に、活動の前には体温を測定、手指消毒励行、三密と換気の注意等を行っている。今回の非常事態宣言発令下では、解除されるまで休止、9 月再開をめざしている。間があくとどうしても出かけるのが億劫になるし声も出なくなる。ワクチンも打ったことだし出来る限りやって欲しいとの声あり。普段から練習用の CD（各パートのボカロメロディや伴奏などが 1 曲ごとに入っており、ボカロの声に合わせながら歌える）、楽譜を準備しなくても自宅で練習ができるように全員に配布、USB・ケータイへの希望者には音源をコピーしている。これが団員の技術向上や意欲減退防止に役立っている。

ボイトレクラブは砂川学習館を中心に月 1 で活動。内容は、シルバー大学のボイストレーニング＋昭和歌謡とほぼ同じだが。こちらは個別指導にも重点を置いている。　コロナ対策は野ばらと同じ。8 月末まで休止中。

②獲得型教育研究会の活動

月 1 回の定例会はすべて ZOOM によるオンラインミーティング。会員は日本国内のみならずヨーロッパ等にも存在し（主に現地の日本語教育のリーダーたち）、コロナ以前は、毎夏のセミナーに合わせ帰国し参加していたが、ズームを活用することで、通常の定例会にも参加できる機会となり、コロナ以前よりメンバーが多彩になった。イギリス、フランス、ドイツ、スイスなどで広がりをみせている。今夏のセミナーは 8 月 6 日と 8 日。案内がｋａｋｕｔｏｋｕｋｅｎ　web にあり。

③立川ユネスコ協会の活動

設立されて 3 年目の団体である。会員の年齢が比較的高く、基礎疾患をもつ人も少なからずいるので、郵送やメール等での事務連絡に終始しており、残念な状態。来年３月頃までには、第 3 回「平和の心コンサート」が開催できるように、心づもりを始めている。（Ｃ委員）

○私自身かなりの制限があります。海外はもとより国内の活動の中止も多くあり、多くの作家の生活もより厳しくなっているという声も多く耳にしました。活動していく上での工夫は、お客様のお声がけする際、個展の DM、SNS やメールでのご招待の時に、感染症対策をおこなっていること、入場制限を設けさせていただく場合がある旨を明記したり、「ご無理のない範囲でよろしくお願いいたします。」といった文言を付け加えるなど、それぞれのお客様の感染症に対する考え方に配慮した言葉選びをおこなっています。大きなイベントでは、検温、

入場制限、などを行っているようでした。もちろん、個人や団体によっては感染症対策をあまり気にしないでおこなわれているケースも見受けられました。やはり、行政によるきちんとしたイベント開催時の責任を主催側と共有できるガイドラインが必要になるかと思います。（D委員）

○基本的なコロナ対策をベースに、人数制限を軸にした開催が多いと思います。またイベントの属性にもよりますが、オンライン、またはリアルとオンラインを併設したハイブリッド方式を前提とした事業構築がメインになっています。

ただ体感として2021年度は中止になっているものが多く、停滞を余儀なくされているのが実情です。（E委員）

○コロナ禍での文化芸術活動について、主催者それぞれが実現可能な方法を探りながら取り組んでいるという状況のように思う。その上で、参加人数制限や感染防止対策、あるいはオンラインを活用した取組などが見られた。

ただ、オンライン対応は集客が難しい、対応できる人材がいない、充当する予算がないなどの課題があるとの声も聞かれた。また、状況が落ち着いた際には、オンラインではなく従来通りの活動を希望するという主催者がほとんどのようだった。（F委員）

○確かに、コロナ禍において、公演の中止や延期などから、周りの文化芸術関係者は厳しい状況に置かれているように思います。

しかし、コロナ禍という制約があったからこそ生まれた新しいアイディアや公演形態もあり、なかでも個人的には、ソーシャルディスタンス円形劇場に注目しています。

ソーシャルディスタンス円形劇場とは、ソーシャルディスタンスがとれる360度の円形ステージで、のぞき穴（隙間）から、舞台を鑑賞するもので、仮設の舞台のため全国ツアーも予定されています。（G委員）

（３）コロナ禍に置いてのイベント等の開催について、工夫・配慮・支援等の意見を下記の通りいただいた。

○オンラインによるイベントが新たな方法として、可能性があることが分かりました。同時にライブの重要性もあらためて確認することができました。

あらためて、ライブならではの特質を高めていく工夫が必要です。これまでも実施されているワークショップとの組み合わせなど対話や相互性はキーワードになると思います。

コロナ禍以降も、ライブ、オンラインそれぞれの特性を生かして両方を活用できるといいと思います。（委員長）

○支援はこれまでもされており、それは継続して行っていただきたいが、併せて、音楽にしろ演劇にしろ実演の機会を少しでも確保することが、芸術文化振興のためには大切です。ただこれまでの形は、今しばらくは難しい。そこで例えば、ハイブリッド型の催しの開催等、これまでにない形の発信を模索していくことも大切ではないかと感じています。（副委員長）

○既に対応されておりますが、動画配信等Ｗｅｂを活用した取組みが今後も必要だと思います。（Ａ委員）

○個人的には、オンライン開催、他手法など、全国での成功事例などを学ぶ機会があればよいと思います。そうした方を講師に招き、皆さんで知識を学び、共有する機会が欲しいです。（Ｂ委員）

○①朝日新聞の「ひと」欄に、「コロナ接触通知アプリを開発した歌手　野口五郎さん」の記事が載りました。

～デビュー50 周年記念の全国ツアーはコロナ禍で多くが中止に。今月、都内のホテルでディナーショーを敢行した。～、会場には、今夏開発したアプリ「テイクアウトライフ」の QR コードを置いた。客がスマホで読み取れば、来場者にコロナ感染がわかった場合、主催者側から通知が届く仕組みだ。政府のアプリ「COCOA」と違い、個人情報を入力する必要がなく、接触した場所も分かる。飲食店やホールのほか、大相撲初場所でも導入されることになった。～10 年前、公演後にライブ映像などを受け取れるアプリ「テイクアウトライブ」を開発し、特許も取った。今回、それを改良した。「このままでは芸術が滅んでしまう」。そんな危機感から、国会議員や自治体の首長らを回って、アプリの導入を訴えている。（終わり）

～　・・・　とあります。本市でも活用できるか検討の価値あり？

②「かからない、うつさない」コロナ

尾身会長が 7 月 30 日午後、菅首相に直談判、要望は３つ。検査体制の整備、医療提供体制の強化、国民へのメッセージ。特にメッセージについて、「コロナ疲れ」や五輪の影響などで国民に「複雑な気持ち」が生じているとし、「寄り添うメッセージ」を打ち出すよう求めたとある（朝日新聞７／３１朝刊）。このところの立川市の２０人３０人台と続く感染者数を考えると、市としても市民へのメッセージを強く打ち出す必要があると思う。羽鳥健一モーニングショーで長嶋一茂が、コロナに感染した患者のようすを語っていた（彼は知人に医者がいてさまざまな情報が入るとのこと、一般の人が知らなすぎると話していた）が、その深刻さが若者を含めた多くの世代にしっかりと伝わっていないという。その通りだと私も思う。マスコミは過度にならない程度に実情を正確に伝えるべき（今日のニュースではインド型の変異株の毒性は従来株の倍以上との検査結果がでたとあった）。

③「かからない、うつさない」心構えの浸透を図る

青山学院大の福岡伸一先生のウイルス観に私は納得する。ウイルスとうまく付き合っていくための考え方を知り学ぶために、関係の講座やキャンペーンをはり、「かからない、うつさない」心構えの市民への浸透を図る。きらりたちかわ講座ガイドをみると、9 月 18 日に立川相互病院の奥野衆史内科医師が「新型コロナウイルス感染症と医療現場の実情」をテーマにお話をされる予定とのこと。諸外国の悪しき例を見るまでもなく、知恵や知識がゆき届かない所に妄信や迷信がはびこり、安全安心な社会の構築は叶わない。こうした企画をどんどんすすめて欲しい。（Ｃ委員）

○　検温、入場制限、マスクの着用、換気、を必要に応じてお声がけしてくことしかないかと思います。状況によっては、中止の判断をする勇気も必要になると思います。しかしながら、

作家としては経済活動に直結していますので、なるべく中止は避けたいです。行政側の支援としては、感染症の蔓延を防ぐために中止にしても作家が生活を継続でき制作を続けられるような環境を保てるような経済的な援助が必要です。あとは、緊急事態宣言を出すのでしたら、行政側にも責任を持っていただくきちんとしたイベント開催のガイドライン※2を作っていただき、もしもの場合に主催者側だけでなく、行政側にも責任を持っていただくというのも一つの支援の在り方かと考えます。今後、メンタル面でのケアも多く必要になってくるかと思います。作家に障がいがある場合、とくに自身での国などの支援を理解し、申し込むことが困難です。僕のように施設などのサポートを受けられていない障がいを持った作家も多く存在します。（D委員）

○オンラインやハイブリッド配信、VRに必要な環境や設備、またそれに伴うマニュアルや人的サポートが必要だと思います。（E委員）

○オンライン対応の方法についてもイベント主催者が検討、対応する必要があることが多いため、大きな負担となったり、開催そのものが実現しないということもあった。オンライン対応（動画作成やオンライン会場の設定など）への第三者による支援があれば、イベント主催者はこれまで通りに内容の充実に注力できるのではないだろうか。（F委員）

○コロナ禍で、オンライン配信も増えてきましたが、小中規模の団体などでは、配信のための機材を揃えることも経済的に厳しいのではないかと思います。ですので、配信機材の（無償）貸出といった支援があると、有難いのではないかと考えます。（G委員）

※事務局補足…市からのコロナ禍でのイベント等開催の支援として、たましんRISURUホール（立川市市民会館）を例に挙げると、令和2年度には動画配信に対応できるよう、大・小ホールにWi-Fi環境の構築をおこなっている。また、令和3年度にはサーモグラフィカメラを5台購入し、施設利用者への貸し出しを開始している。これによりイベント等の入場時に検温やマスク着用チェックがスムーズに行えるようになった。

※事務局補足…野口五郎さんが開発したアプリ「テイクアウトライフ」について

令和２年８月に、本市でも野口さんをお迎えし、デモンストレーションを拝見した。市や財団が開催するイベント等での導入を検討したが、諸々の課題があり、まだ実現には至っていない。

（事務局注）

※２…イベント開催のガイドラインについては、東京都、また、全国公立文化施設協会でそれぞれ出されている。

・東京都感染拡大防止ガイドブック

https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/taisaku/torikumi/1008262/1008459/index.html

・全国公立文化施設協会感染拡大予防ガイドライン

https://www.zenkoubun.jp/covid_19/index.html

（４）コロナ禍の状況により動画配信等が利用されているが、動画やお知らせをより注目してもらうためどのような取組が必要か、下記の通り意見をいただいた。

〇動画の活用は、今後欠かせないものになっていくと思います。

一つは、発信する側として制作や編集の仕組みをどう作るか。学生やケーブル TV の活用など。もう一つは、配信されている動画（立川市と関係あるもの）をいかに吸収し関連づけるかです。ウェブサイトで一覧化するなど、ハブとしての機能を真剣に考える必要があると思います。（委員長）

〇ひとつは、情報発信の一元化です。市が発信している様々な催しが一つのサイトなどに収まっていれば、そこをブックマークしてもらうだけで、すぐにアクセスできます。もうひとつは、定期的な情報発信です。更新頻度が高ければ、比例してアクセスしてくれる頻度も上がりますが、不定期ですと、アクセス回数は減るのではないでしょうか？　まずはこの枠組みを基本としながら、次にそれを各 SNS などの媒体へ発信するのがよいのではないかと思います。（副委員長）

〇充実した内容の動画を継続的に配信していくことが重要と考えます。（Ａ委員）

〇こちらも知見が浅いため、先進事例の方に学びたい所です。（Ｂ委員）

〇どんなものを作っても”これが一番注目される”というものはないと思う。

先ずは役立つもの、見て聴いて面白いもの、楽しめる内容の作品や活動であれば、注目度は高まっていくのでは。地味な内容のものも含め、アーカイブをしっかりと着実に積み上げていくことが求められる。

市史に関して言えば、「たちかわ物語」動画「暮らしのなかの祭りといのり」といった題材に、興味関心をもって頁を開いてみる、動画を見るといった次の行動へと向かう人はさほど多くはないと思う。或る土地に住み、そこで暮らしていく中で、やすらぎを覚え、ほんとうのふるさとになるか否かは、どの家族にとっても大切な問題である。

そんな中で、今回決まったという立川市ブランドメッセージロゴマーク「立川くらいが、一番いい」はとても興味深い。「一番いい」って誰が決めるの？それはもちろん、決めるのは私やあなた自身。違っていれば、そこから変えれば、という声がする。でもさぁ、「立川くらい」て言い切る根拠や見識はあるの？それは的を得ている？」…二番じゃだめなんですか」と言った政治家のことばも浮かぶ。

「釜の蓋と温泉マーク」のようでふざけてる、いや・リラックスしてていい…など、意見はさまざまに吹き出るだろうなと思う。立川在住の鈴木ユータなる人物の著書「これでいいのか東京都立川市」（マイクロマガジン社刊）に、「これでいい、これくらいがちょうどいいのだ」と反論しているようでもありいろいろ考えさせられる。TV の「ケンミンショー」やご当地キャラクターの人気度争いなどが楽しく白熱してきた。立川の魅力、都市力をさまざまな角度から折にふれて考え、議論していくキッカケになったらいい。

きらりたちかわ講座ガイド今期の表紙に早速このロゴマークを使い、解説は 13 頁とガイドしておけば良かった。（Ｃ委員）

○インターネットでの注目の基本は、魅力的な内容はもちろんのこと、こまめなアップデート、手入れが必要です。作っただけでは人は見てくれないです。人気のある配信者は必ずこまめな配信をおこなっています。ネットで作品などを販売する場合も同様です。ぬかみそのように毎日手を加えることが大切だと聞きます。多くの人に見ていただくにはそういった努力が必要不可欠です。（Ｄ委員）

○事業と対象者にマッチした広報が必要だと思います。また紙媒体や SNS などは勿論ですが、アプリなどのイベントプラットフォームの積極的な活用です。（Ｅ委員）

○　SNS の活用など、動画配信に関連させた周知を行うこと、それも単独の発信元ではなく、複数が相互にフォローし合うような仕組みがあればよいと思う。

公共空間におけるデジタルサイネージを増設、活用することなどによって、意識的に動画にアクセスする層以外にも関心を抱かせる仕組みを築くことも有効かと思う。

ライブ配信や人数制限など、配信動画に特別感を持たせることも、時として効果的かもしれない。（いつでもどこでも見られるという動画の長所が逆に魅力の喪失と捉えられることもあるように思う）（Ｆ委員）

○リアルのイベント・公演に集客できる人数も依然制限されていることから、オンライン配信は引き続き需要があると思われますし、有料オンラインライブ等も増加傾向にあります。しかしその一方で、オンラインライブにお金を払うことに抵抗がある人がまだまだ存在するのも事実だと思います。そうした層を取り込んでいくためには、単にリアルのイベントを配信する以上の、「配信ならでは」の演出や仕掛けが、コンテンツ面として必要かと思います。

　また、プロモーションという観点からいえば、各種ＳＮＳからの導線を確保したり、他のコンテンツ産業との協働、またオンラインライブの顧客のデータをデジタルマーケティングに活用するなど、観客のニーズを取り入れつつ、特に若者への戦略的アプローチが必要になってくるかと思いました。

　なお、個人的に、Facebook で「いいね！立川」をフォローしているのですが、このメディアはフォロワー数も１万人以上と多いため、こういったメディアで、取り組みを取材してもらうのも一案かと思います。（Ｇ委員）

４その他

・今期の文化振興推進委員会で取り上げたい内容等について、下記の通り意見をいただいた。

○コロナ禍で、文化芸術に携わる関係者がいかに大変であったかが浮き彫りになりました。支援の在り方をもう一度丁寧に検証してみる必要があると思います。

コロナ以後は、誰にとっても重要な課題です。オンライン、ライヴなど、この１年半を検証し、次の課題を具体的に挙げていくことも必要だと思います。（委員長）

○大変に申し訳ございませんが，お引き受けして最初の会議がメール会議になるとは思っておりませんでしたので，これについてはまだノーアイデアです。全体像など，ある程度資料を読むと見えてくることもありますが，実際にどのようなことをやられていて，どのような方々が関わっておられるのか，また私たち委員がどのように関わっているのかについては，対面で一度お聞きしたいと思います。（副委員長）

○動画配信での視聴参加向上も含め、市外への広域への配信のチャンスでもあります。立川市様の観光施策と連携し、具体的に何か取り組んでいければと良いかと思い、議題にあげてほしいです。（Ｂ委員）

○①立川市ブランドメッセージロゴマークについて

これを決めた経緯や投票した人の数、ほかの候補案などを教えてほしい※3。またこのロゴに対する推進委員の皆さんのご意見も伺いたい。

②コーディネーター、ディレクター、プロデューサーの採用や育成

前回の市民委員応募原稿で、最後の段の一つに「行政と市民、市民と市民、各種団体・行政機関をつなげるコーディネーターの採用と育成」について、委員会で議論がしたいと書いた。取り組み状況をみると、まちづくり協議会やたちかわ創造舎、シティプロモーション担当部署が、このあたりを担うところかと思われる。「にぎわいとやすらぎの交流都市　立川」を文化芸術面でサポートするディレクター、プロデュ―サーの存在が必要と思われるがいかがなものだろうか。委員の皆さんのご意見を伺いたい。

③当委員会が担当する文化芸術の領域範囲について

前副委員長が前期の委員会で疑問に感じておられた領域範囲の件、主に音楽や美術、演劇、市史等の学術関係を扱っているが、文化芸術という言葉の意味する範囲はもっと広いのではというご指摘があったと思う。文化芸術の全てを網羅することはもちろん扱えない。従って領域範囲を区切るのは当然だと思う。しかし、そのことにより大事な視点を落とすこともあり得る。だから、議題・議事に余裕のあるときは、文化芸術全般について自由に意見を述べてもらう時間があるといい。（Ｃ委員）

○感染症の影響の中、コロナ後もアーティストや作家がどのようにしたら、もっと多くの作家が作家活動のみで生活ができるようになるのか、皆さんの知恵をお借りしたいです。立川市からそれができるようになったら、とてもすばらしいと思います。色々なジャンルのプロのアーティストの育つ街づくりをするにはどうしたらよいか多くの方のご意見をお聞きしたいです。行政の担当の方がどうしたらそうなるか、お考えを、ご意見をいただきたいです。（Ｄ委員）

○上記質問と重複しますが、コロナ禍におけるイベント開催についての情報です。特に開催手法やイベントなどへの助成についてです。（Ｅ委員）

（事務局注）

※３…ブランドメッセージ決定の経緯については市ホームページにて公開されている。

https://www.city.tachikawa.lg.jp/koho/shise/koho/citypro/brandmessage/workshop/index.html

なお、候補は４件、投票総数は 3,909 票。